

ちほの おしゃべりタイム



室 礼



オフィスPrima 代表
フリーアナウンサー
ビジネスマナー講師

とおる ちほ
透 千保

東海地方の各放送局(岐阜放送/ぎふチャン、FM GIFU、東海ラジオ、メーテレなど)で数多くの番組やニュースを担当。司会、ナレーションの他、名鉄電車、名古屋市営地下鉄など、公共交通機関のアナウンス放送に携わる。一方、企業・大学において、ビジネスマナー、電話対応などの研修講師を務め、人材育成に取り組んでいる。

2021年の幕開け。皆様いかがお過ごしでしょうか。一年の始まりは、身も心も引き締まりますね。

昨年、^{しつらい}室礼について学ぶ機会がありました。「^{しつらい}設ひ」は平安時代から使われている言葉です。日本文学者の故・芳賀徹氏によると、宮中の晴れの儀式などを行う際、寝殿内に屏風や御簾といった調度品や、装束などをその場にふさわしく整えて飾り付けることをいい、「^{しつらい}設える」が語源になっています。室町時代になると書院造りの様式が成立して、現在に繋がる床の間が生まれました。床の間がある部屋は儀礼的な空間となり、もてなしの場となりました。

私たちが親しんでいるお正月のお飾りや行事にも、室礼に由来するものが多くあります。正月とは、元旦に歳神様を迎え、昨年の実りと平穏に感謝し、新しい年の豊穡と平安を祈念する行事です。鏡餅は歳神様へのお供え物。鏡餅の上にのせる^{かき}橙は、一つの木に何代もの実がなることから代々家が続きますように、との願いが込められています。歳神様にお供えする料理がおせち料理であり、鏡餅を分かち頂いたものがお年玉で、魂のこもった神聖なものだったのです。

かつて年末年始を過ごしたロンドンでは、1月になってもクリスマス飾りが街に残されていました。英国では、クリスマスこそが1年のクライマックスであり、新年はその延長や余韻に過ぎないのです。しかし日本では、あれほど華やかだったクリスマスのイルミネーションが12月25日の夜にすっかり取り片づけられ、翌朝には松飾りに替わります。そのまま大晦日まで慌ただしさが加速していきます。そして、一夜明ければ、全てが新しくなります。お正月には、日本の伝統的な営みと西洋から伝わった文化が融合して、私たちの今の暮らしが形づくられていることを、改めて感じます。

室礼では、「飾る」ことを「盛る」といいますが、盛り物で使われる柑橘類は「^{きつ}橘」の音が「^{きち}吉」に通じ、その形が大きいほど大吉につながるとされています。そこで私も、大きな^{ばんべいゆ}晩白柚を得て縁起のよい五色の紐と共にリビングに盛ってみました。鮮やかな色彩が目を愉しませ、さわやかな香りが気分をリフレッシュさせてくれます。また今年も、つつがなく新年を迎えられたことに感謝の気持ちが湧いてきました。

「しつらう」とは、一年の節目や人生の節目に様々なものに心をたくし、「季節を盛る」「言葉を盛る」「心を盛る」ことをいい、先人に感謝しながら客人をもてなすことだそうです。去年は様々な変化を受け入れる年でもありましたが、いったん立ち止まって、自分の周りの環境や人々に目を向ける時間を与えられたような気がします。うつろいつつ巡る季節に思いを寄せ、今年が平穏で希望に満ちた幸せな年になることを願わずにはいられません。